戦争と私の青春

春日市　　飯田　昭

私は昭和１８年、繰り上げ卒業して山口県出身にもかかわらず福井県の迫撃三連隊に入隊した。そこへ入隊したのは多分私が応用化学科卒業であり、迫撃砲にガス弾をつめて射撃出来たからだと思う。その連隊はガダルカナル島の最終撤収部隊といわれ、迫撃砲は山かげから撃つので生き延びられたのだと聞いていた。

直ぐに東満州（現在、中国東北地方）の迫撃大隊に移動し、幹部候補生試験に合格し千葉県の習志野学校で教育を受けた。そこではたいした教育を受けなかったが、訓練中友がイペリットを軍靴の上から塗り、消毒の仕方が悪く足の皮膚が損傷したことがあった。それよりも昭和１９年秋からＢ２９の爆撃が定期便のようにやってきて寝不足であった。１２月習志野学校を卒業して東京に一泊したが、この夜も空襲を受けるような始末で満州に帰隊してほっとした。

当時の満州は本土防衛のためか部隊の編成移動が繰り返され、私は結局歩兵連隊の歩兵砲中隊付となった。やがて国境線に一部を残して２００㎞～３００㎞下がり、陣地を構築することになった。残念なのはこの時将校連中の家族は日本に帰国した筈だが、開拓団の方はそのまま残って人柱となり悲劇の根源になった事だ。

間もなく私はハルピンの４７１部隊での情報教育を命ぜられた。この部隊は今考えてみれば満州での中野学校であり、私はこの事のために戦争で１発の弾丸を打った訳でもないのに昭和２５年までシベリアに留め置かれたのだ。教育中のある日、ハルピン市内は爆撃に見舞われた。ああ重慶から爆撃機が来るようになったかと思ったが、さに非ず、日ソ中立条約を破ってのソ連の参戦であった。部隊は直ちに解散。その日の夜、牡丹江に向かって出発した。

次の日朝早く我が目を疑った。道路一杯になって逆方向に逃げる日本人を見たからだ。牡丹江駅は雑然としていて、貨車という貨車には日本人が乗っていた。私は咄嗟に持ち物を整理し、はいのうだけの身一つになった。駅前に出た。まだ元気があったであろう日本婦人の何人かが私の前に来て「兵隊さん、後をよろしく頼みます」と挨拶されて行った。私は思う。彼女達の何人かが、日本に辿りついたであろかと。

駅前の将校の指示で当地の特務機関に勤めたが、四、五日勤務するうちに原隊（歩兵連隊）が山中に１００名ばかりいることが分かって、師団司令部に行った。その夜師団の「部隊長集合」がかかり、我が連隊には将校は誰もいないというので、見習士官の私が代表になった。集合したのはベテランの将校ばかりで見習士官は私１人だった。その時ラジオの録音放送で聞いたのが天皇の「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び」の終戦放送であった。師団長の野溝中将は連日連夜の指揮の疲れからか憔悴している様であった。

次の日山に登った。歩兵砲中隊の兵は１２～１３名いた。兵の話では、私と同期の原田見習士官は将校斥候で前線に出たまま帰らなかった。連隊長の山本大佐は自分の指揮が悪かったと悔やまれ自殺を恐れた副官がついていたが、ちょっとした隙に自尽された。また「指揮官は最

後に死ね」と諭された第三大隊長殿は最後に守兵を集めて突撃されたとか。それにしても６０名以上いた将校は山で四、五日待っていたが一人も帰って来ず最後５００名位の兵が帰って来ただけであった。

この頃からソ連軍の指示を受けるようになり武装解除になった。私の日本刀を自ら抜いたソ連将校は一言「アブナイ」と行って刀の山に投げ捨てた。旧日本軍の兵舎に向かって行軍を始めた。途中真黒になった子供連れの日本婦人に何回もあった。婦人達は私たちとは別の収容所に入れられた。その頃は未だ余裕があったので、先任将校が見習士官に見張らせた。ある夜、阿鼻叫喚の声がした。多分襲われたのだろう。ドイツが負けたとき「ベルリンに処女なし」の新聞報道があったから。先任将校は私たちにこの辱めを忘れるなと言った。

私達の収容所では今度は１０００名単位で編成仕直し、私は２４０名の長となり国境の町、綏芬河の先のグロデコフへ向かって歩き出した。長くて辛い行軍であった。３００㎞はあったろう。ソ連将校はダモイ（帰国）だと言ったが結局うそだったのだ。３日目、一人の兵がカミソリで腹を切った。苦しい苦しいと言うのを軍医が青酸カリで殺した。ソ連兵が道端にあった蛸壺に捨てろと言った。その兵は疲れて歩けないのを分隊長が「今ここでお前を置いては死ぬだけ」と言って尻を蹴りながら歩かせたと言う。満州の秋の夜は冷たい。次の日、兵の一人が朝起きてみたら死んでいた。誰にも見とられずに。行軍して行きちょっと臭いなと思うと軍馬の死体か、水なし川そばで黒い日本兵の死骸があった。漢詩の「男子古来骨を収めることなし」の状況そのままであった。行軍最後の日、ソ連領のグロデコフに入り夜になっても歩きに歩いた。ソ連将校がここで寝ろと言う。闇にすかして見ると何もない平地であった。今までは曲がりなりにも宿舎はあったのに。皆は疲れ果て夕食も食べずに寝た。皆自分の事だけで精一杯で人の事なんてどうでもよくなった。敗戦のうき目をつくづく感じた。

次の日から我々は１ヶ月間近く穴を掘り、枯草を集め枯木を探して青天井の下で寝たのだ。初めての経験であった。皆虱をわかせた。

私の話はまだまだつきないが、このような状況でシベリアに入り寒さと労働が加わったので、私の収容所では１年目の冬は昨日は１人、今日は２人というように死んでいった。死体は穴を掘ることもなく雪をかぶせただけで捨てたも同然であった。昭和２５年舞鶴に帰った時、係官が「あなたの収容所ではなぜにそんなに死んだのか」と聞かれた。何年か前ゴルバチョフ氏が来日された時、日本兵の墓に参って来たそうだが私の場合、墓があるなんて考えられない。ソ連に入った６０万人の１割は死んだと言うが、その中の何人の墓があると言うのか。

ある日私はテレビの画面に釘づけになった。カンボジアで死んだＰＫＯ自衛隊員の遺骨が帰って来るというのだ。何百人かの自衛隊員に迎えらえて、礼々しく。時代は変ったがその万分の一でもソ連で死んだ日本兵にしてやれたら、彼らの魂も救われると思うのだが。

もう一言言おう。私は昭和２５年、シベリアから帰り、国から９７００円の金を支給された。唯１回だけ。兵は７０００円台だと聞いた。日本国民は皆貧乏であったのだ。帰国して１年して公務員のはしくれになったが、その初めてのサラリーが月７５００円であったのだから、９７００円が決して多い額とは言えないだろう。